慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『イールのヴィーナス』と『教父伝』
Sub Title	Vénus d'Ille et Vie des Pères
Author	松原, 秀一(Masubara, Hideichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1991
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.59, (1991. 3) ,p.1- 25
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大濱甫教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00590001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『イールのヴィーナス』と『教父伝』

松原秀一

プロスペル・メリメの『イールのヴィーナス』はメリメ自身が『傑作』であると自負していた作品で、一八三七年の『両世界評論』五月下旬号に発表されて好評を博し、一八四一年五月に『コロンバ』『練獄の魂たち』と共に、単行本としてマジャン・エ・コモン社 Magen & Comon から刊行された。一八四二年以後はシャルパンティエ社からモザイクの題の下に刊行されたメリメの作品集に収められ版を重ねた。この小説は又、一八四五年二月二十五日から三月四日まで『ヴァランシエンヌ新聞』に連載されている。メリメがこの小説の一八三七年四月十八日の日付けのある自筆原稿を友人のアルフォンズ・アラール Alphonse Allart に与えたのも遺っている。自筆原稿では『一八三四年にイルで発見された古代彫刻とその変わった碑文について東ピレネー県評議会委員ペルオラード氏によってなされた解説についてのメリメ氏の報告』RELATION de la découverte faite à Ille, en 1834, d'une STATUE ANTIQUE et d'inscriptions curieuses expliquées par Mr de PEYREHORADE, membre du Conseil general (*sic*) du Dept des Pyrénées Orientales, *rédigée* par Mr Mérimée と題されている。

メリメは我が国では英訳によって早くから読まれているが、邦訳は大正十三年開文社刊の岡田実麿と石川剛の共訳が最初であるらしく昭和三年には慶応義塾大学文学部教授であった広瀬哲士編集の雑誌『佛蘭西文学其の他』七月号～九月号に吉川静雄訳がある。同年には杉捷夫氏が岩波書店から出したメリメ作品集二巻にも訳されている。昭和六年には青柳瑞穂訳が、彼の最初のフランス小説翻訳集である先進社刊『怪談』の中に収められている。昭和十三年から十四年に掛けては河出書房から『メリメ全集』の題の下に書簡集一冊も含む六巻の作品集が出版されているのも注目に値する。石川剛、石川敏夫、矢野恒有、山内義雄、水野茂雄、渡辺一夫、浅野晃、三好達治、杉捷夫、今日出海、水野明、堀辰雄、川口篤、新庄嘉章、生島遼一、大西忠男、根津憲三、前川健一、平岡昇、神西清という豪華な訳者陣で『イールのヴィーナス』は第三巻に杉訳で入っている。

一八三四年に歴史記念物監督官に任命されフランスのみならず広くヨーロッパ各地に調査旅行をしたメリメには考古学者の回想や報告の形を取る作品があるが、『イールのヴィーナス』もその一つで、ピレネー山脈の東の端のカニグー山の麓のイル・スュル・テット Ille sur Têt で発見されたヴィーナスの石像を巡る奇怪な事件の回想の形で書かれている。

ブロンズ像のラテン語碑文中の難語をフェニキヤ語で解こうとする老地方考古学者ベルオラードの息子アルフォンズは名だたるスペインのテニス Jeu de paume の名手と勝負を競うが、試合を始めると次の日に新妻に与える筈で、イタリア語で『とわに君と』と彫りこんだダイヤの指輪が指を圧迫し、邪魔になるので外した。預かろうとしたメリメを遮ってアルフォンズは手近に立っていた青銅像の指に嵌めて試合を続け勝ち、もっと試合をしても自分が勝つだろうと言って相手のスペイン人に悔しい思いを味あわせるが、そのまま指輪を置き忘れて着替えに行き顔を洗って、皆と馬車

にのって婚礼の席に行く。指輪を忘れたのに気づいたアルフォンズは人を取りやったらと勧められると千二百フランもするダイヤの指輪を見れば盗心を起こさせるかもしれし、自分の迂濶さを知らせたくもないからと人をやらず、バリで謝肉祭に帽子屋の女から貰った指輪で婚礼を済ませた。イルに戻った一行は祝宴を続けるがアルフォンズはメリメを宴席から連れ出しで奇怪な事を打ち明ける。銅像に指輪を外しにいったら、像は指を折り曲げていて外せなかったというのである。一瞬鳥肌になったメリメは酒臭い相手の息を吹き掛けられ、酔った余りの幻覚と思い確かめに行くと約束して席にアルフォンズを戻すが折からの雨もあり、馬鹿馬鹿しい話とその儘、寝室に戻って寝てしまう。夜中に階段で重い足音が登って行くのが聞こえるが、アルフォンズが庭に指輪を取りにいったか祝宴の酔っぱらいの足音と思い眠り込んでしまう。翌朝アルフォンズは死んで発見され妻は気絶している。ダイヤの指輪は絨毯の上に転がっている。夜間に誰かが侵入し暗殺されたとしか考えられない。検事が取り調べるが被疑者のテニスの相手にはアリバイがあり、妻はブロンズのヴィーナスが跪いている夫を締め付けているのを見て気絶し、気が付くと像は夫を抱き締めたままで、鶏の声にベッドから出て死骸を落として部屋から出ていったと繰り返すが、勿論まともに受け取って貰えず頭がおかしくなったと思われるのみであった。老考古学者は死に、ブロンズ像は溶かされて教会の鐘になったがイールでこの鐘が鳴り出すようになってから葡萄も二遍、冬の寒さで枯れていると手紙で知らされたという。

メリメが誇るだけあって上手く書かれた短編で、現実感のある怪奇譚である。彫像に指輪を嵌め異界婚を引き起こす話については、既に多くの説話が可能なソースとして挙げられているがメリメ自身は一八四七年十一月十一日のエロワ・ジョアノー宛書簡では『イールのヴィーナスは実在しませんし、碑文はムラトリとオレリを使って上手に secundum artem 拵え上げました。この話はフレハー Freher の伝える中世の伝説を読んで居る時に思い付いたのです。特徴の幾

らかはルカーノスから取りました。ルカーノスはフィロプセウデー Φιλοψευδη の中で人を殴る彫像について話っています。』と言い、ジャン・ブロントンから採ったのでは無いかと尋ねたフランシスク・ミシェル宛の五一年八月十日の手紙では、『ジャン・ブロントンの年代記とはどんなものですか。指輪を大理石かブロンズのヴィーナスの像に与えた青年の話はポンタヌスの中で、これほど不粋な名を挙げる失礼をお許し下さい、読んだのですが、何しろ非常に昔のことなのでこのポンタヌスがどんな物だったかもう覧えて居ないのです。』と言っている。フレハーとはアウグスブルグで一五六五年に生まれた法律学者マルカルド・フレハー Marquard Freher (1565～1614) と思われるが、ポンタヌスはデゾブリ・バシュレの『歴史・地理・人名辞典』Dezobry-Bachelet : *Dictionnaire général de Biographie et d'Histoire, de Mythologie, de géographie ancienne et moderne comparée des Antiquités et des institutions grecques, romaines, françaises et étrangères, 10e édition.* 1895 にも四名が挙がっているのでどれを指すのか、あるいは他のポンタヌスか迷うばかりである。アシェット社版のメリメ短編集に解説を書いた編者J・Pはドイツのラテン学者でありイエズス会師であったヤコブス・ポンタヌスとしながらもフレハーにもポンタヌスにも、この話は見つからないと書いている。

多くの学者の探索にも拘らず、直接のソースは見つからず、イタリアの民話からブルターニュの民話まで仮説が立てられた。一九六七年にメリメの研究家として著名なモリス・パルテュリエの解説付きで出たガルニエ版の二冊本で、編者パルテュリエの言によれば、モリス・ヴェルヌはヴィルマンが『グレゴリウス七世』に引くヘルマン・コルネルを挙げているそうであり又、アルテュール・ド・ボルドリーはマルティノ・デルリオの『魔法研究』*Disquisitiones magicae* を挙げ、十三世紀の散文小説『ベリニュス物語』にも彫像に指輪を預けた騎士の話があると注意しているが、直接

のソースは挙げず、もっとも古い中世説話として十二世紀のイギリスの歴史家ウィリヤム・マームスベリーの『イギリス王行状史』*De gestibus regum anglorum* からの説話を挙げ仏訳している。

この仏訳を重訳すると下記の如くである。

『財産のある若者が結婚式の日に婚礼の宴会の後で若者たちと球遊びをしたくなるということがローマで起こった。婚約者から貰ったばかりの指輪を傷めたり失ったりすることが無いようにと若者は試合の前に指輪を外して傍にあったブロンズの女像の指に嵌めた。試合を終え青年は指輪を取り戻そうとしたが、驚いたことに彼が指輪を嵌めた指が手のひらにつく迄曲げられてしまっていて取り戻すことが出来なかった。この奇妙な出来事について彼は黙っていたが、祝宴が終わって夜、彫像の前を通ると、彫像の指はもう曲げられてはいなかったが、指輪は消えていた。この損失など気にしていないように振る舞った彼は婚礼の寝室に入り新妻の脇に寝た。しかし彼が彼女を抱こうとするや得体の知れぬ固いものが二人の間に入り込んで来ると同時に彼の耳には次の様に言う声が聞こえたのである。「私と寝て。貴方は私の婚約者よ。私は貴方が指輪を指に嵌めたヴィーナスよ。指輪は持っているし大事にしているわ」』

中世にこの話は広く流布していた。ヨーロッパ中の大修道院や大学で広く読まれた十三世紀の百科辞典であるヴァンサン・ド・ボーヴェ *Vincent de Beauvais* の『スペクルム・マユス』の中の『スペクルム・ヒストリアーレ *Speculum historiale*（歴史の鑑）』（第二十六書、二十九章）にあるそうであるから学僧が知っていても無理はない。

十年程前、二年にわたって大学院でゴーティエ・ド・コワンシの韻文『聖母奇跡集』をテクスト・リテレエル・フランセ叢書のフレデリック・ケーニッヒの校訂版四巻 Frédéric Koenig (éd.) *Les Miracles de Nostre Dame* (Textes littéraires français) 4 vols. 1955〜1967 によって読んだことがあるが、その第二巻にこの説話を見つけた。但し

これは聖母マリアの奇跡譚であるから怪奇物語とは異なっている。指輪をマリア像に与えた男は死んだりはせず、僧院に入って一生聖マリアに仕えることとなる。

ゴーティエ・ド・コワンシの奇跡譚はフィンランドの優れた中世学者であったアルテュール・ロングフォルスが弟子達と一連の研究と校訂版を出していて、『自分の指輪を聖母像の指に嵌めた少年に付いて』という問題の奇跡譚も既に一九三七年にヘルシンキで出版されたラングフォルス自身による『エルミタージュ写本によるゴーティエ・ド・コワンシの奇跡』A. Langfors: *Miracles de Gautier de Coinci, extraits du Manuscrit de l'Ermitage* (Annales Academiae scientiarum fennicae, B XXXIV) Helsinki 1937 に校訂されている。

ゴーティエ・ド・コワンシの『聖母奇跡譚』の写本の基本的研究は同じ叢書で一九三二年に出たアルレット・P・デュクロ・グランドリー夫人による研究 Etudes sur les *Miracles Nostre Dame* de Gautier de Coinci, description et classement sommaires des manuscrits, notice biographique (Annales academiae scientiarum fennicae, B XXV, 2 1932) で、元来はパリの古文書学校 Ecole des Chartes に彼女が一九二九年に提出した卒業論文である。以来、写本の略号や説話の整理番号には女史がこの研究で使ったものを踏襲するのが習慣となっている。この説話はレニングラードのエルミタージュ写本では二十三番に当たり、ゴーティエの『奇跡譚』の全体を伝える十七の写本のどれにも伝えられている他、断片写本二十の中でも十一写本が伝えている。

この説話は『お静かに、立派な方々、大変優雅な奇跡を貴方がたに語り申し上げたく存じます。罪人たちが神に約束したものを払う気にさせる為に申し上げるのです。何かを神やまたはその優しき母に約束した方々もいざ払う段にあるとつべこべ言ったり殺し合った逆上したりするのです。Tenez silence, bele gens. Un miracle qui mout est genz

Dire vous vueil et reciter Pour les pecheeurs esciter A sourre ce qu'a Dieu prametent. Trop laidement tout cil se metent Et si se tüent et afolent Qui rien prametent, quant ne〔l〕solent, A Dieu ne a sa douce mere』と始まり、『物の本によると古い教会を立て直す為に、献金を置いて行くように聖母像を教会の前に建てたのであった』と語りだす。

教会の前の広場に青年たちが球遊び Pelote をしたり追っ掛けっこをしたりしに良く集まった。ある時、若い学僧の一団が教会の正面で球遊びをしていたが、女友達から貰った立派な指輪をしていた学僧がその中にいた。恋にのぼせていたのでこの指輪をなくしたり傷めたりしたく無いと競技の間にどこかに指輪を託そうと彼は教会の方に行った。思案していると、新しく置かれた出来たての聖像が目に入った。この美しい像を見た若者は恭しく前に跪き目を潤ませて頭を下げた。僅かの間に心が変わった彼は『今後、一生貴方様にお仕えします。もう今後はどれほど美しく心に適った女性が若し出てくることがあってもつくづく眺めたりは致しません。あなたは私にこの指輪を呉れた女性より十万倍も美しく心に適うのです。あの女性にはすっかり我が心も任せてしまったのですが、貴方への愛の為なら彼女も彼女の愛情も彼女の持つ宝石なども投げ捨てます。この指輪は中々美しいものですがフィヌ・アムールの印として貴方以外に決して恋人も妻も持たないというお約束で貴方に差し上げ度いのです。』というと手にしていた指輪を聖母がまっそぐ延ばしていた指にすっぽり嵌めた。すると彫像はさっと指を固く曲げたので、どんな人間がとろうとしても難しかったであろう。若者は恐怖に駆られ大声を立てたので広場にいる人は身分の高いものも低いものも駆けつけないものはいなかった。

若者が皆に自分がこの彫像に言い、したことを語ると皆はそれぞれ十字を切り奇跡に感じいった。口々に皆はもう一

日も延ばさずに現世を捨てて神と聖母マリア様に一生仕えるが良いと勧め忠告した。マリヤ様がその指の奇跡で彼が聖母を愛によって愛すべきであり他の愛人は持たない様にとお示しになったのだから。しかしこの男は彼の契約を守るだけの知恵を持たなかった。それどころかその約束を忘れ全く思い出さなくなったのである。一日が過ぎ又、新しい日がやってくる。若者は成長し元に戻っていった。愛人に対する愛が彼の目に強く目隠しをするので何も見えないのであった。神の母のことをすっかり忘れてしまった。悔悟出来ぬ程愚かであった。即ち元々指輪の持ち主であった女性を愛することを止めなかったのだ。彼の心をその女性に留めたため我等が聖母を彼女の為になおざりにし、彼女を娶り妻としたのである。婚礼は非常に立派なものであった。というのも彼の家は裕福で家柄も良かったから。夜には大変優雅な部屋に大変上品な寝床が用意された。この学僧は優しい娘を愛するのに心を砕いていたし、この娘も又可愛く美しい女性だったので、学僧は自分の大きな欲望を満たそうと彼女と寝にいくことを大いに欲した。ところが床に付くと直ちに快楽のことは念頭に無くなり、何もせずにただちに眠り込んでしまったのであった。すると善意に満ちた優しき聖母が、あの蜜菓子のなかの蜂蜜より甘いお方が学僧の目の前にすぐに顕れたのである。彼には我等の聖母が妻と彼の間に横たわっているように思えた。聖母はあの指輪をしている指を示した。指輪は聖母に驚く程良く似合った、というのも指はすべすべで真っ直ぐであったからである。

聖母は『お前のすることは忠節でもなく正しくもありませんよ。私に対して酷い仕打ちをしましたね。これがあの女性の指輪でお前がフィヌ・アムールによって私に呉れたものですよ。貴方はお前がしっているどんな女性よりも私の方が百倍も美しいと言いましたね。もしお前が私を捨てなければ私が忠実な友達になったでしょうに、お前は薔薇を捨てていらくさを選び、野薔薇の代わりににわとこを、蜜菓子と甘い蜂蜜を捨てて毒と胆汁を選んでいるのですよ。』とい

った。学僧はこの夢にびっくりして目が覚め、心が動転した。自分の脇に彫像が有るはずだとあちこち手探りしてみたが何も見つからない。妻を抱いていないので騙されたと思った。しかし妻を抱くことは出来なかった。その前にすぐ眠り込んでしまうのである。すると神の母がすぐ怒ってまた顕れるのである。彼に厳しい顔を見せ誇り高く、恐ろしい軽蔑する様な顔をみせるのであった。学僧には聖母が彼から顔をそむけている様に思われた。それ所か、彼を憎み卑しめ威嚇し恥かしめ悪口を言うのであった。何度も学僧を偽証者とよび、贋信者とか背信者と呼ぶのであった。『あの見すぼらしい女のために私を捨て否認したのは悪魔たちがお前を誑かし、愚かにしたからです』と聖母は言った。『お前は汚穢から臭い汚穢の中に汚穢まみれになりに行き、お前の臭い汚穢さの罰に、臭い地獄の汚水溜めに落ちて臭くなるのです。(S'en la pullante pullantie De la pullente t'empullantes, Es santines d'enfer pullentes Sera pullens empullentez Pour tes pullentes pullentez.)』と、学僧は仰天して飛び上がった。我々の聖母を怒らしていまったので騙し打ちにあって死んでしまったのだと思ったのである。もう妻に触れようとはしなかった。(そんなことをすれば)死んで破滅だとちゃんと分かったので、学僧は涙を流して『どうしたら良いのでしょう、聖霊様。このままでいたら立ち所に破滅してしまいます。』と言った。寝床から飛び出してぐずぐずしていなかった。聖母は彼に次のことを考え付かせた。即ち学僧は男も女も起こしたりしないで逃げ出して修道僧となって僧衣を着た。一生、神と聖マリア様に仕え俗世に留まろうとはしなかった。真の友として彼が愛に依って指に指輪を嵌めた『愛人』と共に暮らしに行ったのである。この世には背を向けてマリアと結婚したのであった。『聖マリアさまと結婚する僧も学僧も大変身分の高い方と結婚することになるのだ。だがマリオンやマリオンたちと結婚する人や人々は悪い縁組みをすることとなる。マリオン達によって多くの魂は間違った結婚をしている。神に賭けて悪い縁組みはしまい。マロやマリオンは放って置いて、その

夫と天で結婚するマリアと結婚しようでは無いか』(Moines et clers qui se marie A ma dame sainte Marie Mout hautement est mariëz. Mais cil est trop mesmariëz Et tuit cil trop mesmarient Qui as Marionz se marient. Par Marions, par mariées Sunt mout d'ames mesmariëens. Por Dieu, ne nous mesmarions. Laissons Maros et Marions, Si nouz marions a Marie Qui ses maris el ciel marie.)

フイヌ・アムールというのは『宮廷風恋愛』『精微の愛』といわれ十二世紀から精練されだした恋愛観であり、これについては『芸文研究』第十九号の旧稿『中世の恋愛観と女性像』またモシェ・ラザールの著書の書評(『芸文研究』第二十六号)にかつて論じたのでそれに譲る。原文を挙げておいた箇所に見られる様にゴーティエ・ド・コワンシは頭韻や類語反復の技法を好み、このレトリックは次の二世紀に大いに流行することとなる。コーニッヒ版で四巻のゴーティエの『聖母奇跡譚』を通読するとこの技法は鼻に付いてくるが、中世の読者には見事な技法と好まれたのであろう。

この説話は聖母マリアによって若者が救われる話である。奇跡談であって怪談ではない。現代の我々の感覚では指輪を贈って却って聖母マリアに見返され捨てられてしまう女性がいささか可愛そうな気がするが、自身ソワソンの聖メダール修道院の僧であったゴーティエにとっては俗世を捨てて聖母マリアの下に永遠の生命を得た学僧の救済の方が問題で、学問をし招命を受けながら、俗世に留まろうとした学僧、又、彼を俗世に誘惑した女性は悪口を言われても仕方が無いということなのであろう。

学僧 Clerc は出家の誓願を立てない中なら結婚も出来、俗世の仕事にも就けた。この説話では聖マリア像に誓ったのに守らないことが問題であり、折角、誓いを立てたのに女性の色香に迷って俗界に留まろうとしたのを聖母が呼び戻してくれた訳である。

ゴーティエの説話もウィリアム・マームスベリと同工異曲のものであるからそれ以上、類話も捜さずにいたが、たまたま昭和六十年に金沢で日本フランス語フランス文学会の秋季大会が有った時、金沢に因む泉鏡花とフランス文学について『幻想空間の東西――フランス文学をとおしてみた泉鏡花』というシンポジァムがなされ柏木隆夫氏がメリメの『イールのヴィーナス』と鏡花の『頬白鳥』も取り上げられ既に夏目漱石が『野分』でメリメのこの作品を引用していることを述べられた。『野分』では明るい世界に住む『中野君』が婚約者の女性との対話の形で『去る好事家』が掘り出した『キーナスの像』が新婚の晩に『どたりどたりと二階を上がって』来て新郎が死んで発見される話をメリメから云って話している。『野分』の発表されたのは明治四十一年、一九〇八年であるから本邦初訳の一九二四年より大分前になる。

柏木氏はこの発表を『文学』の一九八九年九月号に『鏡花・メリメ・ユゴー――受容の問題――』として公刊された。このシンポジァムは本の形となって金沢の十月社から一九九〇年一月に出版され、筆者も一部恵贈を受けた。この中で柏木氏は漱石の対話の部分を省いて上手に話を纏めて示しているが、漱石はヴィーナス像の発掘者をテニスをし指輪を像に嵌めた当人としているのが目に付く。この本を贈って下さった私市保彦氏に礼状を書く際にゴーティエ・ド・コワンシのこの奇跡譚にふれ、この奇跡譚が中世の説話の集成として知られているメオンの『十一、十二、十三、十四、十五世紀のファブリオーとコント』四巻の第二巻に入っているとされていることを知らせ、恐らく一七七九年にメオン版の元となったバルバザンの三巻を現代語に訳したルグラン・ドシィーの五巻本にも入っているのでは無いかと言うことも知らせた。メオンは十八世紀後半に現在のパリ国立図書館の基であった王立図書館の司書であった人で一八一四年には『薔薇物語』四巻を、一八二六年には『狐物語』四巻を出しているが、一八〇八年には一七五六年にバルバザンEtienne

Barbazan, 1696〜1770 が作った三巻の『ファブリオー集』*Fabliaux et contes français des douzième, treizième quatorzième et quinzième siècles*, 1756 と *L'Ordène de Chevalerie*, 1759, また前記の三巻の続きと一般に考えられている *le Castoiement, ou Instruction d'un père à son fils* 1760 を元に *Fabliaux et contes des Poètes français des XIe, XIIe, XIIIe, XIVe et XVe siècles* を一八〇八年に出した。これはバルバザン・メオンと呼ばれ、ファブリオー以外の作品も含み今でも有用なのでスラトキン社から近年リプリントも出ている。

ルグラン・ドシィー Pierre-Jean-Baptiste Legrant d'Aussy, 1737〜1800 はイエズス会に学びイエズス会師になったが一七六四年のイエズス会の追放と共にパリに出てラキュルヌ・ド・サント・パレエ Lacurne de Sainte-Palaye や、今日のアルスナル図書館となった蔵書家として著名なダルジャンソン家のポルミー侯爵 Marquis de Paulmy と考古学、文献学研究に勤しんだ学者で王立図書館司書であり、学士院会員でもあったが、バルバザンの『ファブリオー集』を元に一七七九年に四巻の現代語訳を出した。この現代語訳は好評を博し、英訳もされ、一八二九年にはルヌアール A. A. Renouard による第三版も出ている。

そこで慶応義塾図書館旧書庫の厨川文夫文庫に入りルグラン・ドスィーの五巻本を調べると、一八二九年に出た第三版の第五巻にゴーティエ・ド・コムシ Gautier de Comsi 又はコワンシ Coinsi の説話として、この話がソワソンのノートル・ダム尼僧院の写本からとして訳されていた。ソワソンの写本その物についてはルグラン・ドスィーの序文によるとジャン・ラシーヌの息子ルイ・ラシーヌ Louis Racine, 1692〜1763 が読んでアカデミーに報告書を書いているそうである。ルイ・ラシーヌは一七五五年の有名なリスボン地震で息子を亡くしてからは物を書かなくなっているのでそれ以前の著述であろう。ルグラン・ドスィーの翻訳は非常に良く読まれたもので翻訳のみならず巻末に古仏語のテク

ストも色々付いていて、厨川先生が長く捜しておられた。名古屋の西洋中世文明ロマンス語研究所が一七七九年版の四巻本の中初めの三冊を所蔵しているところに、一八二九年の五巻本が二組届いたことをたまたま知った筆者が厨川先生用に一組を譲るように連絡したもので先生没後の御寄付によって慶応義塾の所蔵となったものである。

この仏訳はルヌワールに依る第三版が五冊本として一八二九年に出される程であったのであり年代的にもメリメが読んだ可能性は大きい。そこでルグラン・ドスィーによるこの説話を見てみよう。仏訳は第五巻の五十三ページから五十五ページを占め、七行の感想が付いている。和訳すれば次の如くである。

『結婚指輪をノートル・ダムの指に嵌めた男のこと

聖グレゴリウス教皇が法王の座に付いた時、ローマにはまだ異教徒が多くいた。教皇は異教徒たちが町にある聖者、聖女像を崇めるのではないかと恐れて全ての聖像を取り去り、広場に置くようにと命じた。ある日ローマ人の若者たちが広場で競技に興じていたが結婚したての異教徒が指輪を折るといけないと思い指から抜いてそこにあった彫像の一つの指に嵌めた。そして冗談まじりに『女よ、俺はお前を娶る』といった。この像は聖処女の像であった。しかしノートル・ダムは冗談はお分かりにならず、真面目に取って指を曲げられたので男が取りに来た時には抜くことは出来なかった。

それだけでは無い。夜、彼が妻を愛撫しようとすると彼は強い手で遮られてびっくりした。その手は彼の身体を非常に痛い程押し付けたのであった。彼の苦痛の声に、妻は脅えて灯火を捜しにいった。彼女が遠ざかるとノートル・ダムは若者に姿を顕し自分は彼が証人たちの居る前で若者が娶った者だと名乗った。だから彼女を裏切ってはいけないし、今後は彼の先に娶った妻との楽しみは止めるようにと彼に要求した。この異教徒は魔法に違いないと思い、夜が明ける

や、悪魔を退散させるために司祭を招んだ。司祭はストラと聖水を持ってやって来て、夫婦二人に一緒に寝て前の晩やろうとしても出来なかったことをする様に命じた。自分が聖水を持って二人の側に居る限り、勿論、悪魔も彼らの楽しみの邪魔には来られないであろうから。しかし幾ら司祭が信頼させようとしても二人の努力は無駄であった。またノートル・ダムが顕れて、はっきりと司祭も聖水も役に立たないと言われ、自分は決して背信を許さないだろうと言われた。夫婦はがっかりしてこの出来事のすべてを教皇グレゴリウスに告げた。グレゴリウスはこのことを止めさせられないと教会に力が無いと思われるのを恐れ、決して他言してはならぬと命じたが、他方、若者には禁欲を命じた。これは夫には辛いことであった。

しばらくしてある聖なる隠者が男に週の一日を聖処女に捧げてはどうかと勧めた。聖処女はこの償いに心を休め、再び顕れてこの男に今見せている通りの姿の彫像を作る様に命じた。教皇は始めはこれに反対したが男が、何度かの他の幻でみせしめに罰を受けると威かされ、繰り返して懇願したので、許可を与えた。こうして彫像がうやうやしくサント・マリア・ド・ラ・ロトンドに建てられた。するとその像が指輪をしているので人は驚いた。この男は指輪が彼のものであると見分け、是非お返しくださるようにとお願いした。聖母は願いを容れ、指輪が返されると共に妻との楽しみも再びゆるされた。修道士である詩人はこの奇跡はどれ程ノートル・ダムが良い方かを証するというが、同時に彼女をからかったり失礼をしてはならないことも証すると言う。

一世紀か二世紀前であったらこれらの馬鹿げた小話を印刷して信仰を傷つけると非難されることを心配もしたことであったろう。今日では私は堂々とすべて公刊できるが、それも分別ある精神なら私も同様に、常に尊敬すべきである信仰を、信仰を汚すことにしかならぬ迷信から区別できると確信しているからである。』

メオン版のリプリント版を繰ってみるとこの説話は Dominique-Martin Méon の一八二三年の二冊本 *Nouveau Recueil de fabliaux et contes inédits, des poètes français des XIIe, XIIIe, XVIe et XVe siècles*:, Publié par M. Méon, eployé amux Manuscrits de la Bibliothèque du Roi の第二巻二九三ページから三一三ページにわたる八音節平韻の六百六十二行の『石像を娶った男のこと』と題する作品の抄訳である。

この二冊本の第一巻の巻頭には、この第一冊は一八〇八年の四巻と同じ方法でつくられたがその一部はサント・パレエ氏用につくらせた写しに依ったので、明らかに誤記された字があるのだが原写本が分からないので直せなかったこと、第二巻は王立図書館写本の幾つかから採られた信仰談のみを含むとし『その多くはルグラン・ドスィー氏が知らしめたが特に『天使のお供をした隠者』の話があり、これはヴォルテールのザディークにある可愛い話のお手本となったと思われる。この話はこのジャンルの全ての話のようにラテン語から訳されたものだが、『自分より先に天国にいった泥棒をみて絶望した穏者の話』と一緒にある写本にあるが、その話がこの話の発端となっている。この話は（ザディーグの話とは）違うところがあるが、その相違は翻訳をした詩人たちが訳そうとしているテクストに文字通り従うことに囚われていなかったか、または同じ主題が違う著者に依って扱われたことを証している』と言いザディーグの中の挿話で親しまれている説話の筋を紹介いている。この説話についてはガストン・パリスを初め、多くの研究があるので、それに譲るが、メオンの示すテクストは前に訳文で示したゴーティエ・ド・コワンシの奇跡譚とは異なるものである。ルグラン・ドスィの抄訳もメオン版に依っているがテクストを良く把握したものとは言えない。メオンのテクストでは指輪を嵌めた彫像は古代の女神像であり聖母像では無いのである。いささか長いがメオン版のテクストを訳で示そう。テクストはルグラン・ドスィが訳さなかった『智者は語る義務がある』という良く使われる中世のクリシェをややひねっ

た序論が五十八行付いている。

『ソロモン曰く、愚か者も黙して居れば賢者、と。たとえ賢者でなくとも黙っているならば、人は分別があると思う。そして彼が舌をほどいて語れば自分の愚かさを知らせることになる。黙り過ぎも喋り過ぎも愚かな行いとなる。或る言葉は馬鹿な言とされ、意に反して広まり、記憶に留められ汚辱と恥は永く続く。一撃で百撃の値となる。今後百年も起こらぬ一撃も一時に落ちて来る。神が神を友とするものに約束した喜びが永久に続く聖なる住まいに入れて戴けるように、この死に至る俗世間に平和に暮らして居る者は賢い。天国を目指して努力しているものは幸運に生まれたのだ。その馬鹿げた習慣でこの死に至る世間で愚かな生き方をするものは不幸である。貴方がた、自分の肉体をそれほど愛している方々よ、男とはなんだろう。又、女とはなんだろう。良く見て見よ。そして自分の人生の重さを計って見よ。我々は空気で膨らんだ牛の膀胱のようなものだ。針で突き刺せば針穴から風が吹き出しあっと言う間にしぼんでしまう。我々もそのような物なのだ。金があり健康なときは病気も死も恐れず悪を味わう、膨らませた膀胱のように傲慢と自惚れで膨らんでいる。所が死が我々をつつき、身体を無にし、傲慢を外に吹き出すその切っ先を感じるやいなや、肉体の為に使っていた武具を裁きに有利になるように投げ捨てる。ですから我々は未だ間に合う内に善行を積みましょう。誰も自分の寿命は確かに知れない。全てを取り去る死が我々に挑戦する。死は強者も弱者も打ち倒し自分の不正を償おうともしない。それが不道理だろうと正しかろうと全てを奪うのだ。自分の恥と地獄行きを避けるために備えているものが賢者なのです。さてこれから本当の権威ある本から取った話を申し上げましょう。この本には歴史に書いて無い事は一切私は書きすまい。

聖グレゴリウスの時代にローマには不信者 popelicanz やサラセン人や異端者が多く居た。この人達は神もその教え

も信ぜず偶像を崇め、男や女の形に木像を作って拝んで魂を失っていたのであった。こんな物に仕え、これらの像が念頭にある彼らは愚か者であった。ローマの法王となったあの立派な方に依って、この者どもを神の教えの下に連れて行くという事が起こるまでは、説教を上手に出来る者に相応しくこの者どもに良く説教した教皇は偶像を破壊させ、手足をもぎ取って聖ペテロ教会と聖ラテラヌス教会の間にありコロシウムと呼ばれる広場に集めさせた。先年聞いた所では、この広場に相撲をとったり昔おこなわれたレスリング palestre をしに力を試したい人達が集まるのであった。かつて偶像を崇めた人達が偶像は只の石や詰まらない石か壊れた石であることを眺め、木や石の中には理性も寓意も当然見つかる訳がないと、自分たちの愚かな行いを目で見られるようにとこの場所に置かせたのであった。

或る祭りの日に食事の後でローマの若者たちが相撲の為にここに集まった。最も強い者たちが一人の男に打ち倒されると言うことが起こったので、一同がこの男に感心した。しかし中には、町でも身分の低い者が彼らを打ち負かしたことで憤慨する者たちもいた。家柄も良く豊かで結婚したての若者でこれまでこの相撲をすれば常に賞杯を得ていた男が親族につけつけ言われ、皆から懇願されて衣服を脱いで相撲の準備をした。指に小さいが大事にしていた指輪をしていたが『これは外した方が良い。さもないと壊してしまうだろうからな。これは大事なので、壊したらいやだから』というと女の形に刻まれた像が傍の壁にたてかけてあり、右手を開いているのが見えた。自分の身の破滅を求めることとなるこの男は指輪を像の指の一つに嵌め冗談に『女よ、この指輪でお前を娶る』と言った。

動悸がしたりするどころか息も長く強い男は頑張って最初の勝負から彼を投げ倒したので賞は彼の手に入った。衣服を付け袖で顔を拭うと石像の指から指輪を取ってこようと思った彼は蔦の葉の如く青ざめた。像が拳を握り指輪が外側から見えたのだから。恐怖に心は動転したが、この事が知られ無いように友達の所に戻って何も気づかれない様に振る

舞った。親族は彼と大騒ぎで御馳走を食べた。彼らの間では競技に勝ったものが御馳走するのが習慣であった。彼の友たちが彼の為に大宴会をして食事が終わると散り散りになった。

美しく素直で若く乳房も無い妻を持つこの男は、かの女の腕の間に寝にいった。彼女に触れよう両腕で抱こうと。すると、彼が娶った像が邪魔をして彼の脇に寝てきつく重みを掛けた。男はびっくりして起き上がるとコリゼーで起きたことを思いだした。妻は仰天して裸のままベッドから飛び出した。男は部屋に明かりも持ってこさせたが、良くぐるぐる捜しても、彼を困らせたものを何も見つけられなかった。何も見つからないので灯火を点けたまま寝た。妻を抱こうと彼女の側に行くとすぐに像が出て来て、すぐさま大声で『悪運を招くことをしている。私に対して悪いことをしていることは良く分かっているでしょう。今日貴方は私を娶ったのですよ。それなのにこんなことをしている。このことは決して成就出来ないでしょう。お前が彼女と寝ようと欲する度にお前の所に来てその欲求を禁じてやる。というのも私には禁ずる権利があるのだから。結婚の力に依ってお前は私の愛以外の愛を思うべきではないのです。賢く振る舞いなさい。お前も知っての通り、この力は勝るのです。即ち、お前の信ずる教えはお前がお前の妻以外の女性に罪を犯さず触れられないと確言しています。私はまさしくお前のものでお前は私のものです。なにものも我々を分かつことは出来ません。私は立ち去るが私にどんなことでも悪いことをしないよう注意しなさい。というのもこの女に触れたりしたら立ち所に顕れますからね』というと像は姿を消し彼らの目から見えなくなった。寝台に寝ていた男も女もこれは悪魔だと動転して十字を切るのもやっとのことであった。二人は寝台から立ち上がり恐怖に捉えられ、すっかり不思議さに打たれていた。

若者は悩み、苦しみが心の中に住み着いた。像の中にいたのが悪魔であったことを知った。彼が口にした思慮のない

言葉を囚に彼を自分の方に引き寄せようとした悪魔だと。男はこの事件を翌日自分の司祭に告げた。そこで司祭はすぐに聖水と十字架をもちストラを首にかけ男と二人こっそり家にやってきた。像を彼の前にはっきり呼び出す為に男を妻と寝かせた。するとすぐ像が顕れ男にむかって『学僧も司祭も何の役にも立たない。』と叫んだ。悪魔を恐れている男はすぐ起き上がった。司祭は聖水を像に浴びせ掛け、ストラを像の首に投げ掛け、十字架を前にかざして、悪魔払いを唱え『お前は悪魔か。ここにお姿が見える十字架に掛かられた神に賭けてお前を祓い、神の御稜威によってこの家に二度と顕れぬ様に命ずる』といったが、像は『それは効き目が無い。お前の唱えるとこはみな空しい言だ。十字架があろうとストラがあろうとこの家に来るのは止めないよ。神がこの男に私を自分の妻として彼の側に置くようにして欲しい。この男は自分から私を妻として娶ったのだから、男が信仰を守るのなら、神はこの男を私のものとして確保し持たせるべきです。お前は自分の教えを良く調べてご覧、教えは私の言ったことを命じているよ。ほらこれが彼が私の指をもてあそんで自分の意志から私を妻として嵌めた指輪だよ。お前は自分の教えを曲げようと言うのかね。お前は無駄ごとを唱えている。お前の忠言は彼の役には立たず、このことは終わらないだろうよ。(Einsi vels or fauser tes lois, Mes en vain gastes ten françois, Que cist consels ne li vaudra, Ne jamés ce ne li faudra)』と云った。司祭は悪魔の言葉を聞くと狼狽えて、ロンバルディアの人がなめくじを怖がる以上にこの場所を恐れこれ以上そこに留まろうとはしなかった。

若者はすぐに妻の手を取って悲しんで余所に出掛けた。神とは縁の無い彫像も以前そうしたように風のごとく立ち去った。二人は司祭の勧めでこの自然の法則に反して起った事件を教皇に話にいった。教皇はこの話にびっくりして、若者には妻に触れない様に勧め、神に信頼を託すこと、この事件が人に知られない様にすることを忠告した。(人に知ら

れると）信仰の弱い人は教会がこの事件を解決出来ないほど力がないと考えるだろうと思って、禁じられたのである。若者は話すことは出来るだけ延ばし、罪からも身を守りますと即座に教皇に約束した。

口に出し心から懺悔した男は長く事を起こさずにいたが、もっとも彼にとって辛い重荷は美しい妻に触れる勇気の持てない事であった。この快楽を楽しめないという悩みで長く苦しんでいる内に、彼の事件に良い意見を与えて呉れるかもしれない完徳の聖なる穏者の噂を聞きつけた男はなんとかその人の跡を追って捜し求めたいと思った。悩みの軽くなることを求めて、ぐずぐずせずに自分の土地ローマから遠く旅をした。尋ね尋ねてプーリアで穏者に会えたが探索は辛いことであった。悩みを軽くしようと男は事件を起こった通りに穏者に語った。神を懼れる穏者は『友よ、貴方の歳と分別なら何にもまして善を保つのが良いことはお分かりじゃろう。というのは神は善に身を保つ男女をお支えにくなるのじゃから。しかし人々が良き才能からそれることがない程喜んで仕舞わない様に、神は何かの意図の中に止められる。丁度、挿し木の蕾が凍る季節を避けようと閉じるように、咲き急いだ花が寒さに困ったりしないようにな。神は自分の友、天国を約束した人達が悪に身を投げ込まぬようにと近くに留められる。思うに神はお前を欲しいと思われて居られる。さて何をしたら良いか言って進ぜよう。告白し悔悟しなさい、そして妻に触れず、優しき純粋で繊細な神の母、あらゆる善意で輝くノートル・ダムを力の限り崇めなさい。土曜毎に聖母にミサを捧げなさい。神によってお前に告げる。確実にノートル・ダムに仕えたら、ほどなく聖母が忠告をお前に与えるであろう。聖母に仕えて百倍のお返しを得なかったものは居らん。』『穏者様、全てお任せします。心の底からお約束しますが聖母にお仕えしましょう。それではお暇します。他に御意見も無い様ですから。どうぞ私の為に祈って下さい。神が私を悩みからお譲り下さるように』と言うと男は穏者から分かれた。

苦労を続けたのでローマに辿り着いた。穏者の忠告を守り言われた通りにした。少しも偽りの心無く神の母を出来る限り崇め週に一回ミサを挙げた。意を尽くして努力したのでノートル・ダムも嘉納なさった。

彼がミサを上げ始めて丁度一年経った晩、一人の女性が彼の前に立った夢を見た。その人からはその場所が輝くばかりの大きな明るさが発していて、そのことに彼は大きな喜びを得たのだが自分はベッドで寝ていたのであった。婦人は其処に立つと側で横たわっている彼に『兄弟たる友よ、私に似た像を作ることを命じます。高価なものでも安いものでもよいが、像が自分の前に息子を抱いている様に、良く彫刻した立像で、心を込めて作り色を塗って、誰からも文句を言われないものを作りなさい。この仕事をするのがお前に相応しい。途中で放棄してはいけません。私はお前が仕えて呉れている者です。良きお返しをしあげるから、良い物がお前にやってくるでしょう。』と言うと消え去った。

男は目を覚まし酷く不思議に思った。夢のことを考えあぐね、教皇に告げ、反対されなければ彫像を作ろうと考えた。夢の話を聞いた教皇は『友よ、ローマ中で男であれ女であれ像を立ててはいけないと布告が出ているのは知っているであろう。像を作るものは裁判に掛かり、即座に断罪される。だから夢に見たにしてもそう云うことはしない様に命ずる。前にも言ったように思慮なきものが像を崇めたりしないように禁じたのだから』と言われた。男は何もしません、良いことではない様ですからと答えて辞去した。次の晩、又声が聞こえ彼を考え無しと言い怒った声と、脅かす姿で『お前は愚かものだね。私の欲する所を否定するとは馬鹿げた忠告を得たものだ。像を作れば、感謝するような贈り物を上げるのに』と告げた。

この警告を恐れた男は翌日教皇に聖母の言葉を告げた。教皇はすぐに『心配せずもう一晩待つように命ずる。この事をお知らせ下さっているのが神なら多分もう一度起こらずにはいないだろう』と言った。三日目の晩、寝るとすぐ声が

聞こえ『愚か者め、お前には分別も良さもないことが良く分かった。私が求めることをしないで済む様に私の忠告に反対する意見を捜しているところを見ると。それがお前のために大きな損失となっていることを知りなさい。この町中で悪魔たちが崇められるために、彫像を作っていたでしょう。そこで私はお前に神と私の栄誉のため教えを広める為に私の像を刻み権威として置くことを三度もお前に言いつけたのに、私の為には何もしようとしない。言っておくが五月の祭日までに像を作らず、何もしなかったら、非常な不運が起こりお前はそれから逃れられず破滅の内に死ぬし、この仕事に反対の者も皆お前と共に破滅の途に付くことになろう。』といった。男は夜が明けるとすぐに起き上がり、たとえ禁じられても像を作ろうといった。反対を恐れずあの女性を信頼しだれに対しても彼女を弁護すればどんな悪いことも起こらないであろうと。教皇のところに駈けていってすぐに婦人がかれに告げた警告を言葉通りに伝えた。教皇は神に依って彼に像を作る様に命じた。三度もそのことを示されたのは神がそれを望まれているのだと分かったのである。そこで男は職人をあちこち捜し出して像を作り、優雅で汚点のない像を金、銀で塗り皆に見える所に上手に据えた。

像が出来あがるとどんな彫刻師も石工もこれほど美しい像を模作出来ないほど優雅なものであった。この知らせは到るところを駆け巡り、男が悪いだけ善女であるローマの婦人たちはこの像に悩みを訴えようと行列となってやってきて、この世すべての婦人であるノートル・ダム・ラ・ロンド教会の主祭壇の上にこの像を据えさせた。この像はここで崇められ、良き人々によって誉れとされた。これほどの像は見られたことがなかったので大事にされたのもこれが最初の聖母像だったからである。

愛人が居ないのに恋するものは愚かである。この像を作った町人は愛されていた、というのも彼の方も愛していたから。毎日この像に自分の不幸を嘆き、お救い下さいと訴えるのであった。ミサを挙げることは彼の気に入っていたが、

ある日、僧も俗人も多くいる眼前から像が消え去った。像が皆から見えなくなったので嘆きの声が上がった。像を恋人としていた町人は苦しみと嘆きを口に出さずにはいられず『ああ、どうしたら良いだろう。恋も喜びも全ての救いも失ってしまった。我が慰めも、我が望みも、ああ、苦しみも期待も増えますように。熱心さが私の心を締め付け、私の心臓を取り去るだろう。ああ、神の優しき母よ、ああ。かつて私を憎まれた聖母よ、事件の後も前も親切であった方よ。私をお忘れになったら私の背負う荷は重すぎてしまうでしょう。百合の如く純白な、バラの色の、太陽が雲に隠れてもあらゆる美しさにまさる様に、その美しさが何によっても変わることの無いように我が聖母はあなた方全ての美しさに勝っておられます。海にある水程もお持ちの慈愛と善良さが無くなったら。神の御子は十字架に架かられ苦き死を味われた時、貴方様を勇気づけられようと眺められ、貴方を憐れまれて聖ヨハネに貴方を託されました。どうぞ同じように慈悲を持って、優しき聖母よ、我々を眺めて下さい、貴方の像を我々にお戻し下さい』と。

こう苦しんで泣きながら悲しんでいると像は一同の前に又、顕れた。その右手は握られていた。皆にはその人差し指に指輪をなさっているのが見えた。目の前のはっきりした奇跡に驚きながらも皆、喜び、大勢の不信心者が心を改め神の掟に従った。町人は喜んで前に出た。すぐに自分の指輪だと見分けたのであるが、振りには示さなかった。喜びで身を雰わせてその場から教皇の所に告げにいった。教皇はすぐに来られて奇跡を見た。教皇は町人に『あそこにお前の指輪を頂きに行くことを勧める』と言った。町人はいそいで駈けて言って涙ながらに彫像に指輪をお返し下さいと頼んだ。すると像は手を開かれた。人間の心臓を持つ誠に本当の謙虚さに満ちたこの男は誉れと喜びを受けようと前に進み指輪を取ったが妨げも無かったので自分の指に嵌めた。こうして彼は妻と色々の喜びを取り戻したのであった。七年間もかれを苦しめた悪魔が彼に襲いかかることもこれより無くなった。男は一生の間謙虚な完全な心で神の母に出来る限

り仕え、このことで全ての彼の悪い行いを償った。聖グレゴリウスはこういう聖像をどこでも作るように命じローマでこの年に起きたこの事件のためにイエス・キリストが信じられているところでは何処でも聖母とその徳を祈りで讃え、像に発する大きな救済の為に聖像を作っている。聖グリゴリウスがこうおさせになり、多くの人が恐れ、教皇自身もそこから起こったことが原因で恐れたローマにあった多くの偶像は、そこから別の悪い事件が起きないように飛び石に使わせた。飛び石は今もありずっとあり続けるだろう。多くの道化者も真面目な人もローマにいるかぎりこれを踏んで渡っている。』

この後七十行の後書きが付いているが既に予定の枚数を超過しているので省略し、幾つか注釈の必要な箇所についても今は触れない。ルグラン・ドスィは異教の像と聖母像の二つを区別せず、聖母がヴィーナス像から指輪を取り戻して来た状況を明らかにしていない。従ってこの説話は又、始めから聖母像に指輪を取られてしまうゴーティエ・ド・コワンシの聖母奇跡譚とも異なる。コーニッヒ版で紹介したこの聖母奇跡譚は一八〇八年刊行のバルバザン・メオンの第二巻 Barbazan-Méon : *Fabliaux et contes des poètes françois.* ... T. II 1808. pp. 420～427 に Du Varlet qui se maria à Nostre-Dame, dont ne volt qu'il habitast à autre の題で既に刊行されていた。ルグラン・ドスィは訳に当たってこれにも目を通していた筈である。いや或いはこの奇跡譚を知っていたことが、彼が訳した説話では二つの像で対立していたことを読み過ごさせたのかもれない。

一九八七年に『古仏語テクスト協会叢書』S. A. T. F. から『教父伝』の第一巻が刊行された（*La Vie des Peres* publié par Félix Lecoy, Tome I）『教父伝』は『古代教父伝』*La vie des anciens peres* とも言われる七十四話は主としてエジプト、シリアの初代の僧を主人公とした説話集である。この内、最初の四十二話が二冊の校訂版になるこ

ととなって、二十話を含む第一巻が届いた。これを読んで行くと、驚いたことに、その第十七話が正にメオン版で読んだのと同一のテクストなのであった。異文が散見されるのは勿論であるがメオンが校訂したのと同じ説話なのである。即ちルグラン・ドスィも序文で『聖母奇跡譚』と『教父伝』の混在を述べていたがこの説話こそ『教父伝』からゴーティエ・ド・コワンシの作品の中に紛れ込んだものの一つであり、メオンもルグラン・ドスィも聖母奇跡の一つとして扱ったのであった。『教父伝』にはラテン語による祖型もあり、複雑な問題を含む。それについては機会を得て、再び論じられれば幸いである。本稿ではメリメも目にすることが出来たメオン版、またルグラン・ドスィ訳の類話を紹介するに留めておく。尚、メリメに関する文献では研究室蔵書でメリメを専攻しながら早世した故沢井定夫君遺贈のものを利用できた。留学中、彼の死の報知に驚かされた三十数年前のことをまざまざと想起したことを付記し、故人の冥福を祈る。

『……発掘された古代の女神のブロンズ像が人をしめ殺す話を物語った『イルのヴィーナス』(三七)などを書くが、すべて冷たく簡潔な文体で、読者にあたえる効果を充分計算に入れて厳密にむだなく構成された話であり、ときにはあまりにも作られすぎた感じをあたえる。実生活の上でもつねに冷静なダンディの態度を保つが、これは人一倍鋭い感受性と激しい情熱を隠すための仮面であったともいわれる。……』(大浜甫)『新潮世界文学小辞典』